

高等学校グランドデザイン会議第4回第2専門委員会概要

日時：平成19年1月16日（火）

13：30～16：30

場所：県立図書館 研修室

< 出席者 >

高山委員長 佐々木副委員長 伊東委員 遠藤委員 工藤委員

佐藤昭雄委員 佐藤和志委員 佐藤勝俊委員 下山委員 新田委員 杉田委員

斗沢委員 野呂委員 馬場委員 福原委員 藤田委員 本谷委員

開会

司会

それでは、定刻になりましたので、ただ今から「高等学校グランドデザイン会議第4回第2専門委員会」を開会いたします。

報告事項

【事務局が、配付資料に基づき説明】

司会

資料1については、高山委員長からお願いします。

【高山委員長が、配布資料に基づき説明】

司会

続いて、資料2から資料6までを説明します。

【事務局が、配付資料に基づき説明】

司会

それでは協議事項に入りますので、ここからは高山委員長にお願いします。

協議事項

高山委員長

検討会議からの指示・意見について、資料5にまとめていただいておりますので、それについて進めて行きたいと思います。資料4は、検討会議で議長から方向性として示されたものです。第2専門委員会として関係するのは、資料4の4番の統廃合の組み合わせという事になります。必要に応じて優先的に考慮すべきではないかという事で、(ハ)として普通高校と普通高校、工業高校と工業高校

という同種類の高校の組み合わせ、更に(二)として商業高校と農業高校、あるいは商業高校と普通高校の組み合わせはどうかという提案です。その他(ホ)として水産高校や他の高校との組み合わせはどうかという事も書いています。この事について少し考えてみてくださいという宿題を持ってきましたので、皆さんと話し合いをしたいと思います。まず、お手元の資料5は、学科・コース等の検証という事で私が先程読み上げました。また、併せて背景について、私共が今まで話してきた流れを、 、 という形で列記しています。この部分で大体皆さんの意見が集約できていると思います。右側の欄の空欄は、検討会議から指示や意見はなかったという事です。この部分について、何か意見等があればお話しくださいと思います。

次は2ページの、(ア)各学科・コース及び系列の検証という部分です。上の部分が職業教育を主とする学科についてですが、私が話した事は、基礎・基本という事でこれまで何度となく我々の中で話し合われた事が基本であるという事を検討会議において報告して参りました。下の部分は総合学科についてという事で、様々な社会とのつながりという点で総合学科は優れた仕組みであるという事が、関係する委員の皆さんから出ていた意見だったと思います。ただし、施設・設備や教員数の問題があります、という事でもお話ししてきました。この件についていかがでしょうか。

次の3ページに入ります。これまで設置した学科・コースについて、先程の検証を踏まえて今後はどうなのかという事です。高校全体という事では、現在ある学科の統合・再編成により教育課程を編成し直し、入学後も多様な進路希望に柔軟に対応できるようにするのが望ましく、また、職業観、勤労観を育成するキャリア教育の充実を図る、という事を報告してきました。3ページの下の囲みの部分が普通科及び普通科に併設される専門学科という事になり、それについては、右側の欄に検討会議の意見があります。「普通高校の特色化、多様な学習ニーズという観点で設置してきた理数科や外国語科について、学科の設置基準で農業に関する学科、工業に関する学科と並んで外国語に関する学科とか、理数に関する学科というのが法律にある訳で、青森県が空白になるとどうなるのか、青森県の公教育として必要な事なのかを十分検討する必要がある。県内3市にある学科については、いくらかでも残して行く必要があるのではないか。」という意見が出ています。また、「学科の中には途上のものもあり、それを全て積極的に廃止して行くという方向では決してないと思う。」という意見が出ています。普通高校にある専門学科の今後の在り方という部分では、やはり定員割れという事がありますが、中には、評価される部分はあるという事も我々の話の中で何度となく出てきています。そこで、普通科及び普通科に併設される専門学科について意見等をいただき、話し合いたいと思います。併設される専門学科が無くなるという事は、多様な選択肢という部分で問題があるのではないかという点についてです。我々の意見としては、定員割れしている学科は見直しをする必要があるのではないかという部分と、一方では、ただ廃止するだけでなくもう少し工夫する必要があるのではないかという部分で両論併記しており、玉虫色な表記になっています。どなたか意見をお願いします。

A 委員

先程出ました第2次の志望状況調査などを見ましても、そのような色が出てきていると思います。なかなか中学生の段階で専門的な所を選ぶ事に躊躇してきているようです。

高山委員長

決して普通高校に併設された専門学科は成果がなかったとは思いません。ただ、設置した当時と今の社会や経済の状況が少しずつ来ています。中学生の考え方や職業観も変わり、将来の方向性について確立できない子が多くなってきている中で、専門学科に仮に入ったとしても出口部分で難しいという事ではないでしょうか。

B 委員

「廃止を含めて見直しをする必要がある。」これはいいと思いますが、見直しをした結果、存続するとなった場合にどういう形で存続させるべきなのかを考えるとはいけません。学科として存続させるならば、これまで以上に学科の特色を打ち出す必要があります。そういう特色を打ち出した学科であれば、様々な取り組みをする上で利点があると思います。また、コース制という形で残すとなると、私はあまり特色は出せないと思います。本校で言えば、スポーツ科学科があります。いわゆる普通高校における専門学科です。普通科の生徒と違って、学校設定科目として特に体育的な科目を沢山勉強します。それから、ボランティア活動ですとか、地域社会に呼び掛けて一緒に行く公開講座などの取り組みがあります。もし、これが野辺地高校にあるようなスポーツ科学コースという表現の内容であれば、今やっているような特色を打ち出した授業ができなくなるのではないかと考えています。野辺地高校にはスポーツ科学コースがあり、スポーツ科学科というのは弘前実業高校と八戸西高校にあるのですが、コースとなった場合どの程度の取り組みができるのかという不安があります。八戸西高校普通科の中にスポーツ科学コースがある、というようになると、今のスポーツ科学科のような特色は打ち出せないのではないかと考えています。

高山委員長

スポーツ科学科がスポーツ科学コースとなると、特色が薄れてしまうのではないかとこの事で、もう少し工夫が必要だという事だと思います。これまで話してきた中で、外国語、英語、理数という話もしてきた訳ですが、これらについてもどこかである程度は線引きをしなければならぬと思います。定員割れが続いている状況であれば見直しの対象としていいのではないかとこの事で、廃止を含めて見直しをする必要があるとしています。

私の記憶では、スポーツ科学科は今までの実績を踏まえると、廃止の対象にはならないと理解してきました。ある程度の基準や進路の方向を踏まえて、今提示された専門学科を見直しをする事はやぶさかでないという事です。

C 委員

この件については、以前私が話しを出しましたので、意見を述べたいと思います。必要か必要でないかどちらかを選ぶとなると、今まであったものだから今後必要という事になってしまうと思います。ただ青森県の今後を考えると、少子化が進んで行く訳ですから、志願倍率とか地域の保護者の方々のニーズなどを考慮しながら普通科の中の学科についても、統合なり再編なりを考えて行かなければならないと思います。例えば、英語科、外国語科等では志願倍率が1倍を超えている所もありますし、超えていない所もあります。1倍を切る状況が数年続いているようなら、統合や再編を考える必要があると思います。

もう1つは理数科についてですが、県内では五所川原高校だけになる訳ですが、実績は出していると思います。実績というのは志願倍率と特に大学進学という面での実績です。平成18年の春には東京大学に現役で複数の合格者が出ています。理数科の特色というのは、理数系に特化する事なのですが、現状としては特進クラスという事で地域の方々に評価されているのかなと思います。今後の青森県、日本の教育を考えた場合、五所川原高校は進学実績という面で機能していますし、現在問題になっている、理科離れをそのまま放置していいのかという問題もあります。五所川原高校の理数科が無くなってしまいますと、もう青森県に理数科は無くなる訳です。

最後にもう1つですが、八戸北高校は理数科が無くなり、今は国からSSH（スーパーサイエンスハイスクール）の指定を受け、理科教育に対して特化できるカリキュラムを作り、補助金も受けています。よって、理数科は無くなったが、特色ある理数科教育を続けている、と私は見えています。

青森県の理数科教育に関しては様々な方向から今後の展開を考えるべきであると思います。

高山委員長

全て一元的に廃止や見直しの対象とするのではなく、ある一定の基準と言いますか、例えば倍率や進学の状況等を踏まえると、意見にあるように県内3市に残しておく事も必要という考え方もあります。廃止を含めた見直しの対象に普通高校の専門学科を入れるとしても、その基準や効果を踏まえて決めて行くという事でよろしいでしょうか。

D委員

中学校は選ぶ側になりますが、理数科や外国語科を希望する生徒が少ないのは、中学校側の指導の仕方にも原因があると思ひ、考えなければならないという気がしています。一概に少子化という事だけではありません。ただ、現状を見て行くと、外国語科にしても、英語科にしても、理数科にしても、そこに行った場合は将来の進む方向や大学が限られるのではないのでしょうか。将来何になりたいかという事を保護者も子供達も考えます。従って、その辺の中学校の指導の仕方をもう少し広げた方がいいという気がしない訳でもありません。それから、うちの学校は1学年100人くらいなのですが、理数科や英語科はかなり優秀な子供達だけが志望する訳です。ですから、各学校でも限られてきます。町村にある学校などは推薦で入るという事がない訳でもなかった訳ですが、ですから極端に言うと、

選抜方法は外国語科は英検何級を取ると他の教科はいい、理数科は数学がかなりよければ他の教科はいい、という方法もあると思います。中学校としては、理数科だけ良くて他の教科が悪くければ平均点が低くなりますが、その辺の段階で、選抜方法をもう少し考えて行くという事もあると思います。選ぶ側からすると、無くなってしまおうと選べませんので、私としては、理数科、外国語科を含めて、ゼロにしてしまおうとなると行く学校が無くなってしまおうという気がします。

高山委員長

中学校の生徒の進路に対する専門学科への考え方という部分で、全くゼロになるのは多様な選択肢がなくなり、つらいものがあるように感じました。

E 委員

私は全日制普通高校に学年1学級のみ設置されている学科について話してきましたのですが、それは全てを見直すとか、全てを無くするという事は言っていなかったと思います。普通高校の中で1学級だけ設置され、しかも定員を割っている学科についてです。理数科などは背景もあって機能していた部分もあったとは思いますが、三本木高校では中高一貫のからみで理数科が無くなる訳です。理数科として人が集まっていなくて、特進科という位置付けにしても1倍を割るのです。現状では保護者や生徒のニーズという事を考えた時に、全日制普通高校に学年1学級だけ設置されて、定員も数年間割っているという学科については、やはり見直しをしていいのではないのでしょうか。全てを見直しという事ではありません。誤解の無いようにお願いします。

高山委員長

検討会議からの意見等についての我々の考え方ですが、今まで話してきた内容でいいのではないかと思います。全てが廃止の対象なのではなくて、一定のルールの下で何年か連続して満たない場合は見直し、廃止を含めて検討すべきであるという事で、一切合切無くして道を閉ざしてしまうという事ではないという事でよろしいでしょうか。

4ページへ進みます。専門高校における職業学科の捉え方、今後の在り方という所です。色々な意見を出し話し合いをして来た訳ですが、基礎・基本重視の観点で統合・再編するという事で検討会議に報告しています。高校長協会の意見としては、「統廃合の組み合わせでよく分からないのが総合学科です。新しい形の総合学科というのは、統廃合する上であり得るのか。」、それから「統廃合の組み合わせは、どんな組み合わせも不可能ではない。全国的には、商工などもあり、年間行事、教員数、場所がきちんとしていれば別に問題ない。」という意見が寄せられました。専門高校の学科・コースの在り方について、専門の先生方から少し意見をいただきたいと思います。

F 委員

資料に書かれているように、専門化・細分化されて来た学科を基礎・基本重視の観点で統合・再編するという事ですが、その組み合わせは資料4に書いてある

とおりに思います。お互いに施設設備を持っているもの同士は難しいと思います。例えば農業高校と工業高校であれば、農業高校は自然を相手にしますし、工業高校であればものづくりですから、そのように培って来た文化を融合するのは非常に難しいです。工業高校と商業高校、農業高校と商業高校とかであれば、また違った可能性があると思います。従って、そういった方向は考えられますが、お金を掛ける事が難しいという状況であれば、既存の物を見直してベーシックな物を重視して行くべきだと考えます。

高山委員長

ある物をいかに活用するかという事になると、色々な設備の関係で農業高校とか工業高校という組み合わせは難しいのでしょうか。可能性があるのは、工業高校と商業高校、あるいは農業高校と商業高校であれば可能ではないかという事でした。

G 委員

工業高校と農業高校とかというのは、私としては分からないのですが、先程議論がありましたが、結果的には入りたい学生がどれだけいるか、おもしろいかどうか、それがあって判断されるべきだろうと思います。工業高校で1つの学科でも複数の学科でも、今の時代に合わなくなって来ているという状態は、うちの高专でも学生に現れて来ていますので、少し再構築みたいな形を考えています。色々な学科もありますが、近くの工業高校にあれば一緒にやり、無ければ学科の中で工夫をする。税金を使っている訳ですから、それに見合った学生が入って、出て行く。そういう学校であるという事を、学校自信が説明できないといけません。それをどこで線を引くかというのが課題ですが、それは明確に出さなければならぬと思います。どなたかが言った、農業高校と商業高校というような、縦ではなく横のつながりのような再編という事はあるべきだと思います。

H 委員

資料4に書いてあるとおりに思います。基礎・基本を社会へ出るための基礎・基本と考えると、組み合わせについても、工業、農業、商業などとあまり拘る必要はないと思います。後は工業の学科で仕込んで行くのか、商業の学科で仕込んで行くのか、それだけの差なので統廃合はどの組み合わせでも可能で、その方が効率もいいと思います。基礎・基本を重視するという意味で商業、工業ではなく、産業高校的に考えて、社会において有能な資質をきちっと高めた人間を送り出すという事で、むしろ一緒になった方がいい部分があると思っています。

再編についてですが、現在うちの学校は8学科ありまして、最近発表された志願者の状況を見ても分かりますように、ある学科は2倍を超えています。また、ある学科は1倍強となっており、学科毎のバラツキが大きいです。この差が教育効率を悪くしています。学科により、入るレベル差が大きいため、1つの学校の中で明らかに差がついているという現実です。工業高校に入りたいという生徒が、学科の選び方次第で合否が決まるのです。その辺をどうすべきかという事ですが、ある程度大きな括りで、なおかつ、学科再編だけでなく、募集の仕方も含め

て考えるべきだと思います。基礎・基本と、工業で言えば「ものづくりの心」が伝わればいい訳ですから、そのきっかけを作ってあげればいいと思います。今のような細分化は、学校の運営上も好ましくないの、ある程度括って行く再編は必要だと思います。

高山委員長

現場の話では、細分化し専門性を高めた結果が、進路や自分なりのやりたい事を狭めてしまうという事です。産業高校という考えの話をいただきました。設備の面で難しい部分もあると思いますが、手元の地図を見ながら考えるとイメージもしやすいと思います。

I 委員

4 ページに書かれている内容については賛成です。再編の話について、商業が農業や工業と少し違うのは、ものを作るのではなく、売れるものを作ってもらい、それを社会に提供して行く技術を学ぶ事です。そのためにはコミュニティー能力を身に付けさせなければいけないし、経営、経理に関する部分も学ばなければなりません。この事は、これからの農業、工業にも必要な事です。そう考えれば、全てに係わるのが商業であると私は思っています。再編という事では、何にでもくつつくのは商業ですし、なおかつ設備もお金も掛からないのです。ただ、一番懸念するのは、前回話しのあった他県の例を聞いて、目的意識の無い生徒が楽な方に向かってしまう傾向です。農業や工業は現場の実習などでかなり厳しいものがありますが、商業は水や餌を与える必要も無いですし、ものを作るという事もない訳です。どちらかというとな楽な方になりますから、目的意識の無い生徒が商業に集まってしまうという可能性が無い訳では無いと思います。統廃合した時に、その辺の指導をしっかりと行ければ現場は対応できるでしょうが、なかなか難しい問題だと思います。

J 委員

今回の中学生の志望状況を見ても、各地区で差はありますが、専門高校は非常に倍率が高いです。これが本当に中学生の希望なのかと思います。前から言われているように、普通高校へ行きたい、普通高校志向というのが明らかにあります。私はそれが満たされていない結果だろうと思います。その最たるものが、八戸工業高校、八戸商業高校、弘前地区では弘前実業高校、弘前工業高校ではないかと思えます。普通高校が現実に少ないから、専門高校で2倍を超える倍率という事であり、私は明らかに生徒の希望ではないと思います。専門高校の統廃合がまず先にあるという論議ですが、そうではなくて生徒の希望を満たす事を第1に考える。専門高校の統廃合というのは、もの凄く必要な部分もありますし、学科の見直しも必要ですが、最初の前半の5年間で生徒の入れ替えがどんどん起きるような仕組みを作り上げてはどうかと思います。具体的には、弘前であれば、黒石商業高校の生徒は弘前実業高校に入れられないから来る訳です。弘前実業高校に多数の生徒が希望していますが、その中で専門高校を目指している生徒もいますが、弘前という都市から郡部に行きたくないという生徒も間違いなく沢山いると思いま

す。そういう生徒がいるために倍率も高いのです。やはり普通科の生徒の定数を上げる必要があると思います。いわゆる一部の進学校だけを上げても駄目な訳で、少し下の普通高校も上げて行く事によって、例えば黒石商業高校が定員を割るかもしれません。そういうふうにしてある程度生徒の希望に沿って入れ替える事によって、専門高校を希望する生徒は減ってくると思います。うちの学校などもそうですが、全てが入りたくて入った生徒ばかりではありません。そのようにして、生徒の希望に沿って徐々に適正にして行くという事が必要だと思います。他の部会の資料を見ると、少子化だから黙っていても自然にそうなるという意見もありますが、そう一気に減る訳ではありません。10年間の中で減る訳で、10年間を待っていたのでは、この会議で検討する意味がありません。やはりある程度生徒の希望が実際の希望となるようなシステム作りを改革の前半に持ってきて欲しいと思います。その場合には、当然一時的に公立高校の定員が増えますので私立高校の反対もあるだろうと思います。しかし、都市部から入りやすいからといって周辺の地域に流れる生徒は少ないと思います。ですから私立高校へ行く生徒も沢山いると思います。そういう形で、ある程度生徒の入れ替えをし、第2段階では、これまでの専門高校のノウハウを大事にし、どういうアプローチで生徒を育てるかという事になると思います。本当に工業が好きだ、農業が好きだという生徒を対象にして、高大連携を通じてスペシャリストを育てて行く、そういうふうに指導できればと思います。

統廃合についてですが、先程もありましたが、商業は色々な学科と結びつきます。ただ、工業と商業、工業と農業など、全く異なった学科を統廃合という事で簡単に結びつけるのは、実際には旨く行かないと思います。また新しい学校を作る訳には行かないという事もあり、統合する訳ですが、1つの学校の中で複数の学科が並列になっただけでは、確かに経費は浮くかもしれませんが、メリットが出てきません。私は、早期の統廃合は積極的に行う必要がないと思います。むしろ縮小して行き、農業などは地区によっては合体できる所もある訳ですから、そういう所は合体して、所帯を小さくして中身を濃くして行くというのが私の考えです。

高山委員長

専門学科の今後の方向性は、高大連携を通じて専門性を高めるとというのが方向性だろうと考えます。生徒の志望と違っているという話もあった訳ですが、全ての普通高校の生徒が多くなるという事は、大学へ行くという選択肢は普通高校が一番多いのでしょうか、専門性という部分では専門高校がインターンシップや大学との連携など様々な部分で実社会に一番近い学習をしています。今一番青森県で抱える部分で悩ましいのが、働く場所が減って行くというどうしようもない流れがあります。業を興すという事は普通高校では学べない部分があり、一介のサラリーマンになるよりは、技術、独立などを含めてビジネスという観点から皆さんから出て来た色々な組み合わせは、単純な統廃合ではないというように私は感じています。

K 委員

産業構造から見れば、最終的な高等学校の統廃合が見えてくると思います。しかし、私は産業高校構想にはあまり乗りたくありません。どちらかと言うと、同種専門高校による統廃合の方がまだいいのではと感じています。あるいは、小さくても存在価値のある学校を目指すべきと考えています。私達は現場で、管理職から企業努力をしるとよく言われます。企業努力とは、普段の授業でもそうですし、生徒をどう育てるのか、生徒をどう集めるのかという事です。生徒が集まらなければ学校が無くなるという言われ方もされているので、常に敏感に動いています。その中で小さくてもキラリと光るという展開をするために、小さい学校は小回りもききますので、小さくても単独校である専門高校の方が動きやすい場面も多々あります。そういう事を考えると、単に経済的な観点の考えや産業高校という事で業同士をくっつけるといった単純な発想で良いでしょうか。専門高校にはそれぞれの業の立場もあり、それぞれきちんとした背景があります。同じ業同士であれば分かりますが、統合した産業高校構想には簡単には乗れないと考えています。九州にある産業高校の校長先生のお話を聞く機会がありました。産業高校という事で、農業あり、工業あり、商業ありという中であって、学校で何が行われているのか校長すらよく分からないそうです。また、岩手県のある工業高校の先生との話しでは、確かに、その工業高校の倍率は高いのですが、生徒のほとんどが中央志向であり、3年間学んで岩手県に残る者はほとんどいないそうです。確かに、高校の倍率は高くて自分自身は嬉しいが、育った生徒が関東、また最近では中部の需要が高いのでそちらに行き、地元岩手に残る者はほとんどいないそうです。農業はどうですかと言われた時に、私は少しほっとした気がします。専門高校の在り方として色々あると思いますが、地元で生徒がどのくらい残るのか、地元の産業にどのくらい貢献するのかという事も大事だと思います。

L 委員

私は、今話された考え方と同じで、統廃合しなければならないのは理解していますが、できれば同じ学校同士、農業は農業である程度の規模に合併するのがいいと考えています。どうしても商業高校と工業高校などをくっつけなければならない時は、生徒の感情的な事を考えると、例えば商業高校と農業高校が一緒になる場合は、農業に入って来る生徒はそれなりに目的意識を持っている生徒もいますが、仕方なく来ているという生徒もいます。その中において、先程の話にもありましたが、生徒は楽をしたいから商業へ進むという話がありました。農業科のように片方は外に出て学習する、片方は中だけで学習するといった感情的な部分もありますので、できれば商業と農業というのはよくないと思います。先程の話にもありましたが、産業高校みたいに農業もあり、工業もあり、商業もありという学校であれば、生徒はそれなりの気持ちで来ると思います。生徒の感情的な部分で旨く行かない事もあると思います。

高山委員長

なかなか難しいですね。

G 委員

高専ですが工学という事で、技術屋が技術の事ばかり一所懸命やっていると技術バカになってしまう部分があります。大学ではマネジメントテクノロジーというという事で、少し広い視野で技術を展開して経営に活かして行く、パテントをどうして行くかという事の視点も出てきています。そういう時に、商業の先生方の技術と我々工学の技術の両方が勉強できるようなシステムがあると、もっと広がりが出て来ると思います。そういう視点は、若い時から始める事が大切ではないかと考えます。この会議で普通科の話がありますが、普通という事は先送りなのです。そこの所ができるシステムが必要で、工業、農業、商業のこれまでの特色を活かした形を考えて行かなければならないと思います。

I 委員

産業高校という趣旨については賛成です。と言うのは、現在私共の学校では、ねぶたキットというのを作っています。これが専門高校同士の連携という事になります。農業も、工業も、商業も連携して行く、そのためには高校生同士で契約や売るためのマーケティングを経験する事は、高校生にとっては凄くいい事だと思います。お互いに学んでいるものを認め合い、生徒同士でPRして行く。そのためには、交流や効率が必要だというような事を生徒はどんどん学んで行く訳です。そういう点で産業高校みたいなものがあれば理想的だと思っていますが、ただ、それ以前に目的意識を持った生徒が専門の分野をどのように勉強して行くのかという事があります。目的意識が無いと、先程の話に出ていたような方向に流れてしまうのではないかと思います。できれば小さくてもいいので、専門の分野を学びながら連携するような方法を専門高校で確立して行けば、専門高校はまだまだ伸びて残って行けると思います。

高山委員長

単純にあれとこれをくっつけて産業高校を必ず作るという事ではありません。普通高校は先送りだという話もありましたが、早くから職業意識を植え付ける意味でも、専門高校の特色を活かしながら生徒のやる気を引き出し、あるいは課題解決の方法や産業社会とのつながりを考えさせて行くためには、農業高校だけ、商業高校だけではなくて、様々な組み合わせも考える必要があるのではないのでしょうか。絶対にやるという事ではなくて、そういう方向も考えるべきだという事を我々の意見としてまとめたいと思います。

H 委員

少し誤解があるようなので発言します。先程の話の中で、工業高校には入りたくて入った生徒は少ないという事ですが、うちの学校は工業高校に入りたいという生徒がほとんどです。その理由は2つあって、本当に工業が好きな子と、就職しなければならないから就職に有利な学校という事で工業を選ぶ、という2通りあるのだらうと思います。卒業と同時に就職しなければならないという生徒は6割程います。生徒が普通高校から就職するのと、専門高校から就職するのでは、受け取り側の評価が大きく違ってきますので、そういう意味から専門高校の役割は増えて行くはずだと思っています。

J 委員

私の説明が正確でなかったのかもしれませんが、確かに、全国的には工業高校は希望して行く生徒の割合が高いと聞いています。

高山委員長

総合学科については次回以降協議する事となっておりますが、どうなっているのでしょうか。

事務局

これまでの話し合いの中で学科・コースの今後の在り方という時に、先程の話の中で総合学科は大変優れた制度だという検証はされていますが、今後の総合学科をどうして行くのかについては、まだ意見としては出ていません。まだ十分に話されていないという事で、次回以降協議というようにしました。また、総合学科については、系列をどうするのかという事もありますので、よろしく願います。

B 委員

先程からの話を聞いていますと、学校と学校の統合の話にもう既に入っている感じがするのですが、ここでは工業高校には工業高校なりの学科があり、それらの学科がそのままの数でいいのか、統合あるいは再編する必要があるのか、そのような形で話合うべきではないかと思いながら聞いていました。

検討委員会の意見に、統廃合の組み合わせには、全国的には商業高校と工業高校の組み合わせなどもありと書かれています。異業種間の学校の統廃合、例えば商業高校と工業高校、商業高校と普通科、農業高校と普通科とか、そのような話に移って来ている感じがします。工業高校なら工業高校、商業高校なら商業高校にいくつかある学科の統合や再編についての議論が先ではないかと考えています。7ページに統廃合による新しいタイプの可能性という項目があります。この所で、同種類の高校以外の統合について話をするべきだと考えています。

高山委員長

蛇口委員長の私案の中で、同業種以外の組み合わせで新しいタイプの高校を考えて欲しいという事がありましたので、それに話題が引っ張られた部分があったかもしれません。そこで、学科の再編・統合の事も含めて意見を伺います。

B 委員

私は専門高校の経験が無いので、中身については分かりません。八戸工業高校では8学科あるというお話でした。それを6学科にする必要があるという事であれば、私の方からこうしたら良いのではないかと、というような事は特にありません。ただ、資料に書かれている「専門化、細分化されてきた学科を基礎・基本重視の観点で統合・再編する」という考え方は非常に良いと思います。

高山委員長

これまで何回か話して来た中で、私の記憶では、学科については基礎・基本が大事という事に視点が移ったと思います。専門化・細分化されて来た学科を基礎・基本重視で見直すという所は、皆さん同じだと思います。具体的にはどのような事があるのか、学科の見直しはどうなるのか、専門高校の統廃合はどうかというように、少し先走った部分があったと思いますが、皆さんの考えはいかがでしょうか。

K 委員

農業に関して言えば、これまでの専門化・細分化の見直しを踏まえて平成18年度入学生から新しい学科に改編し、7学級あった学科が6学級になるとか、既にそういう事を含んだ意味で動いていると私は捉えています。

F 委員

工業高校では、どこの県でもそうだと思いますが、最初に工業高校ができたときには、機械系、電気系、土木・建築系という形で始まって来たと思います。それから、今のように電子、情報、電子機械、デザインと分かれて来た訳です。もう工業高校では、その細分化について行けるレベルではありません。あまりにも細分化し過ぎて来たという事を先生方は認識していると思います。そこで、資料に書かれているように、もうこれ以上細分化する必要はないでしょう。これ程細分化して来た中で、工業そのものに基礎・基本があるという事に気付いたという事です。例えば、私は情報科と機械科の指導をして来ましたが、情報科の生徒にスピーカーを作るという事で図面を渡したら、それを読めない生徒がいる訳です。情報科だから製図をやらなくていいのでしょうか。図面を読めなくていいのでしょうか。あるいは機械科の生徒にテスターを使って測ってみてくださいと言うと、テスターを使えないのです。工業としての基礎・基本を確かめる時代になったのではないのでしょうか。更に確かめるべき事は何かというと、募集の事などを踏まえながら議論を深めて行く事が必要だと思います。更に具体的な事を議論するという事ではないと考えており、全く書かれているとおりだと思います。

B 委員

この資料にある枠で囲まれた部分というのは、最終的に検討会議へ報告されて行く訳です。専門委員会でこのように方向性を出したという事で、「専門化・細分化された学科を基礎・基本重視の観点で統合・再編する」というのが答申内容になって行くのだろうと思いますので、そういう形でいいと思います。

高山委員長

総合学科についてはいかがでしょうか。

A 委員

青森中央高校は総合学科を始めて4年目で、今の3年生が2期生になります。それでも4年間総合学科をやっていて色々な課題が見えてきました。コース制で

も学科制でもなく、総合学科では系列という言葉を使っているのですが、7系列を持ってスタートした総合学科ですが、以前もお話したように施設・設備の面、教員配置の面、また選択科目数が120くらいあり、そういうものを見直しながら進めて行くべきだと考えています。本県では七戸高校が平成8年にスタートしましたから、その先進校の色々な情報を見ながら総合学科の内容を少しずつ変えて行けば、更に信頼される学校になれると思っています。

話は変わりますが、今日渉外部の職員が来て、東北大会に2つの部活が行く事になり約160万円かかるが、その160万円をどうするかという話になりました。学校規模の問題になりますが、学校が小さくなると子ども達のそのような活動にも支障が出てくると感じています。本校も将来どうなるか分かりませんが、だんだん生徒の数が少なくなってくれば、色々な教育活動に支障が出ると考えています。

高山委員長

総合学科に関する話を聞くと、「産業社会と人間」という教科など、普通高校や専門高校に比べて地域コミュニティと連携した取り組みをしていますので、新しいタイプの学校として実績を上げつつあるというように私は感じています。

A 委員

普通の学校であれば、家庭科の先生は家庭基礎とか家庭総合という2つの科目を担当しますが、本校の家庭科の先生は7科目も8科目も指導しています。また、総合学科の良い所の1つは、進学指導ができるという所だと思います。今年度の進学状況ですが、昨年度に比べるとかなり進学率が上がっています。普通科ではないのですが、人文科学系列とか自然科学系列というのは、大学進学したいという子ども達を育てる事ができます。青森中央高校でも進学ができるのだというように市民の見方も変わってきていると思います。青森中央高校はかつて家庭科学科、リビングデザイン科という学科がありましたのでそういう系列もあります。また、介護福祉関係では健康福祉系列がありますので、そういう勉強もできるという事です。先生方は大変ですが、色々な事ができるという可能性がある事で、子ども達にとっては高校に入ってから選べるというのが非常にいいと思います。勿論それに関しては指導をします。面談もしつこいくらいします。自分の将来プランであるとか、人生プランであるとか、様々なものを作らせますので時間はかかりますが、そういう良さはあると思います。

J 委員

総合学科のいい部分を伺いました。非常に理想的ですが、そういう学校をどんどん作っていいのかという気がします。おそらく、先生方がパンクしてしまうのではないのでしょうか。七戸高校は、県内で最初に総合学科になりましたが、はっきり言って、旨く行っていないという反省が出ています。青森中央高校が先程の話で非常に旨く行っているというのは、進学を目指している生徒が多いからだだと思います。そうでない学校の総合学科はなかなか難しいです。全てが中途半端になっていて、これからは少し括り履修するなど、ある程度コントロールして行か

ないと、自由な生徒の希望だけでは旨く行かないという話を聞いています。可能性が非常に高く、そういう学校があつていいとは思いますが、各地区に1校あればいいと考えています。

高山委員長

総合高校は先生方が大変だという事もありますが、非常に多様な教育を行い、色々なメニューがあるという事です。個々に学習指導をしっかりと行くと、学びの意識、将来の進路への明確な目標設定、地域社会との関わりという面で評価される部分はあります。しかし、先生方の負担であるとか、中身やカリキュラムについては検討する必要がある、今のままで決していいという訳ではありません。地域バランスという話も出ましたが、全てが総合高校という事ではないという事です。

H委員

今、ここで話題にしているのは、普通高校を母体にした総合学科です。専門高校を母体にした総合学科というのは考えられないかという事です。というのは、次の話題の高大連携と関連して、たくさんの科目を作らなければならないなど、今配置されている先生だけでは満足なものができないのであれば、例えば八戸の場合ですが、八戸高専や八戸工業大学などとの連携が実態として取りやすいですから、そういう考え方をしてもいいのかなと思っています。

高山委員長

総合高校をベースにした、あるいは職業高校を含めて、より専門性を高めるために高大連携や地域社会とのつながりを強化して進める新しいタイプの総合学科という事です。

H委員

専門高校において、大学に進学する率が高くなる傾向も見られます。その要求に応えるという面からも、総合学科的な考え方を含めて検討する事が望ましいと考えます。

高山委員長

我々の考え方として取り込んでいいのではないかと考えています。異論がなければ、何らかの形で検討会議に報告したいと思います。

続いて、普通科における全日制単位制の在り方についてです。資料に検討した結果と報告した内容があります。普通科における全日制単位制は非常に優れた方法である。細分化、専門化し過ぎた学科・コースは不本意入学という可能性がある、単位制は評価できるのではないかという事です。この部分について検討会議の意見はありませんので、このままで良いと思います。

6ページは、新しい学科の設置の必要性についてです。県議会や下北地域などからの要望が出ており、それらの意見について右側に記載しています。また、私が検討会議に報告した内容について書いています。これに対する高校長協会の意

見は右側にありますが、内容が玉虫色では困るという事でしたので、できればこの場で方向性をしっかり打ち出したいと思います。また、要望があった学科というのは、先程事務局から説明があった原子力関係の学科という事です。地域性を考慮して、原子力に特化した学科を設置して欲しいという要望です。また、おいらせ町からの介護福祉関係の学科設置の要望については、私立高校が設置している学科について敢えて進出する必要はないのではないかという意見が検討会議から出ています。ここでも玉虫色の意見を排除してはっきり方向性を出して行きたいと思います。皆さんからの意見については、先程の県議会からの意見書も踏まえて揉んでいただければと思います。

M委員

これについては、私から何度も発言させてもらいました。下北地域となると原子力とか海洋科学という事になり、大きな企業が存在しています。下北は原子力半島と言われるくらい、原子力関係の施設が整っています。勿論ただ学科を作ったからといってすぐに就職できるかということ、そういう事にはならないだろうと思います。これは原子力に限らず何でもそうだと思います。高校を出てスペシャリストになる訳ではありませんから、1つのきっかけとして、例えば原子力に関する知識を吸収した上で、原子力関係の企業に入る事ができるとか、あるいは原子力関係の研修施設とか、そういう施設を経て地元施設に就職できるというようなラインができれば非常に良い事だと私は思っています。

たまたま、11月に商工会議所がむつ工業高校にという事で請願したようですが、むつ工業高校に考えられるのであればそういう方向でもいいと思います。学科的に無理という事であれば、総合学科という事でもいいと思っています。是非、玉虫色ではなく、作るという事をお願いしたいと思います。

高山委員長

介護福祉関係は専門の方がいませんので、事務局から説明してください。

事務局

手元に資料を準備していませんので、記憶にある範囲での回答になります。現状では、八戸市内は光星学院高校の専攻科において介護福祉科を行っています。また、専門学校もあります。青森市内は東奥学園高校が福祉科を行っています。県立では、七戸高校が総合学科の系列の中で介護福祉士の受験資格を得られるような教育をしています。同じように大湊高校でも行っています。私立の専門学校という事では弘前市内に福祉の専門学校や短大があります。そういう事で、県内に介護福祉に関する教育をする施設が様々あり、県南が若干多いという現状です。また、我々が掴んでいる所では、介護福祉士になるための時間数、あるいは受験するために必要な高校教育における時間数が1,890時間と膨大な時間になるのではないかという事について、現在厚生労働省において検討しています。そうすると高校教育だけで教育するという事は、いくら専門の高校を作ったとしてもかなり無理があります。作った方がいいが何も受験できる資格がないままで世の中に出すとなれば、3年間無駄な生活になってしまうのではないかと、というのが

我々の認識としてあります。これに関しては、実際に専門学校を運営している方にも聞きましたが、より専門性の高い介護福祉士という方向に進んでいると話していました。

J 委員

高校長協会の家庭科部会でもその話が出まして、高校ではもう無理だろうという事でした。

高山委員長

介護福祉関係については、若干無理があるようです。原子力関係については、地域性という部分もあります。地域に応じた新しい学科の設置については、地域性に合った学科の設置があって良いという部分を、我々のまとめとしてどのように表現して行くかという事があります。ピンポイントの需要が地域として必要性があるのかという疑問がありますので、専門性の高い教育によって初めて活躍できるものでも、原子力という部分に特化しなくても、下北半島には風力やバイオ等のエネルギー施設がありビジネスとして伸びていますので、環境やエネルギー関連の学科は考えてもいいのではないかと思います。意見にもあるように、観光科は需要があるうちは良かったのですが、今は需要が無いために定員割れをしています。需要と供給の問題があるという事ですが、これは失敗例ではなかったかと思えます。観光が非常に伸びるであろうという中で作ったのですが、観光に特化した大学という所はそれ程ありません。そういう中で需要が無ければ入った生徒は大変であり、専門性を高めて行く事がどうなのかという事があります。

G 委員

八戸高専では、そういう事について考えて行こうとしています。原子力も含めたエネルギーという事について、ITERもありますし、うちの職員には原子力研究所から来ている者もいます。先程言った学科再編の中でそういう事を考えています。ただ、原子力というのは、かなり理学の基礎がしっかりしていないと理解できません。見えない物を学ぶ訳ですから。我々の機械工学科ですと実際に動きがあり見えますが、原子力となると完全にバーチャルな世界を理解する事になり、かなりの基礎が無いと駄目になってきます。高校だけではかなり難しいと思えます。

A 委員

検討会議からの意見で玉虫色の意見では困るという事ですので、後半を削ってしまい前半の再編という議論の中で、工業の学科の名前を変えて行けばいいのではないのでしょうか。2つ列記したために専門委員会の意見としては困ると言われたのであれば、統合や再編の中でやればいいのではないのでしょうか。

N 委員

むつ商工会議所の気持ちも分かりますし、介護福祉関係に関するおいらせ町の考え方も分かります。ただ、今までやってきて、それぞれ既存の学科の再編につ

いて、どこを再編させる、どこに何の学科を新設するという話は今まで議論していません。それなのに、県議会から来たから、おいらせ町から来たからという理由でその要望に応えて果たしていいのかという議論をして行かなくてははいけません。そうなると、県内全域から色々な要望が出てきますから、それに対してどのような対応を取るのかという事もあります。私は、我々の意見が玉虫色ではないと思います。1つの学科を作る事がここに与えられた仕事なのかどうかという事まで議論しなくてははいけません。どこの学校を統合するとか、どの学科を再編するという部分まで我々に与えられているのでしょうか。与えられていないのであれば、方向性だけを示すという事になりますので、これで十分だと思います。そうでないと、それぞれの地域の事を十分に踏まえて我々は検討している訳ですから、地域の実情に応じて色々な考えをしてくださという要望がある訳です。ですから、この学科をここに作るのか、ここに介護科をやるべきだという事ではなく、時代に対応して柔軟にするべきだ、というぐらゐの考え方でいいと考えています。

M委員

私はむつ商工会議所の動きは知らないのです。この会議が始まって間もなく、むつ下北地区部会の場合は地域的な事を話してきました。もう1点、下北の場合は、地域的に三八上北、中弘南黒などの地域とは違って、半島の中だけでも中心地域の田名部高校などに1時間半もかかる地域なのです。従って、私はそういう地域的な事を頭に入れて考えざるを得ませんし、そういう発言をせざるをえない訳です。川内高校が大湊高校の川内校舎になります。大畑高校も田名部高校の大畑校舎という事で分校になります。大湊高校が総合学科で川内高校が普通科なのです。田名部高校は普通科で大畑も普通科です。これから校舎化になる学校が今後どうなるのかは分かりませんが、学校の施設を何とか維持したい、継続させたいと思うのが普通だと思います。そういう学校を利用して、こういう使い方もあるのではないのかという意味で、原子力であるとか、あるいは海洋科学であるとか、大畑に学校がある訳ですから、そういう使い道があるのではないのかという事を含めて発言しています。施設があるという事は、常時専門家がいる訳ですから、そういう方々に来ていただいて講義を受け、実地体験を受ける事ができる訳です。そういう面では非常に恵まれていると思いますし、できるのではないかと私は思っています。大畑高校で放射線について教えている先生がいます。そういう放射線の教育を植えつけて行かなければならないという発想で先生はやっています。独自にそういう施設を訪問したり、交流したりして、現在活躍している方がいます。むつ工業高校に学科を増やすというよりも、そういう形の道があるのではないかと思います。

高山委員長

具体的にどうするという事ではなく、そういう考え方も必要ではないかという事だと思います。それでは、囲みの部分について少し表現を変えてみたいと思います。ここについては、時間をいただいて事務局と相談して、後で皆さんに示したいと思います。

7ページの、統廃合による新しいタイプの高校の可能性についてです。1つの形として、色々な専門分野を横断的・総合的に学べる新しいタイプの学校は可能ではないでしょうか。ただ、予算が無いので新しい校舎の建設は理想ですが難しいようです。まだ課題が色々残っているという表現になっています。右側は高校長協会の意見です。今まで色々な形で話してきましたが、専門が異なる高校が一緒になるというのは難しいのではないかと。商業と農業は接点も多いのではないかと。同種高校以外で順応性があるものもあるのではないかと。他県の失敗例があるから、相性が悪いから止めておこうという考えでは少子化の時代に対応できない。統廃合の組み合わせはどんな組み合わせも可能であり問題ない。このような意見をいただいています。

そういう部分についての話は尽きたと思いますので、この囲みの部分の内容で問題は無いと思います。新しいタイプの高校として検討する必要はあるが、ただし、色々な条件があり厳しい、というただし書き付きですがよろしいでしょうか。

Ｊ委員

改革の後半になれば可能性が出て来るとは思いますが、急いでやる必要は無いと思います。

高山委員長

今までも色々な形で話をされて来ていますので、これまでの内容でいいと思います。

それでは、専門学科の募集方法についてです。ここは既に答えが出ていると思います。括り募集が非常に効果的なのではないかという事を答えたいと思います。色々な面で学校経営で関わって来る部分だと思います。定員と希望の差が大きい場合の調整、あるいは夢叶わずも続けて行こうという部分への配慮が必要であるという事を踏まえながら、取り入れてはどうかという事です。

Ｌ委員

括り募集は青森県では行っていませんが、農業高校において全国的に一時的に流行した制度ですが、今は結構減っています。確かに今の生徒達は、総合学科と同じで、農業高校に行きたいという意識は無く点数的に入って来ている生徒が多くいます。ですから、1年かけてこういう学科が向いているのではないかという方向付けをする事は必要だと思いますが、折角入った専門高校で1年生の時に専門を学ぶ事ができないという理由で、農業高校では少なくなる傾向にあります。

Ｊ委員

商業高校では、かつて1年生は共通履修という形を取った学校もありましたが、入学の段階で自分の入る学科は決まっていますので、2年生になると否が応でもそこに入ります。その時に自分が入った学科に進みたくないというケースがありましたが、残り2年間では学科の特性が出せないのではないかと感じていました。今はむしろ括り募集の方が必要だと思っています。

高山委員長

資料の5については、これまで検討してきた事の再確認と、検討委員会からの質問に対する対応という事でした。

次は資料6です。高大連携、中高一貫という事で、これまでで積み残しになっている課題です。「3 高等学校と中学校や大学等との連携の在り方」について、少し時間を使って検討したいと思います。事務局から説明してもらいます。

【事務局が、配付資料に基づき説明。】

高山委員長

資料6は、検討課題に対する意見を取りまとめたものです。検討状況の方向性という事で、右側には高校長協会の意見も載せてあります。色々書いていただきましたので、今後の中高一貫教育について検討してください。

M委員

大湊高校、大湊中学の地域ですので、意見を述べたいと思います。実は先月の20日頃に私の意見をFAXしたのですが、この中にはありません。取るに足らない意見だったかもしれません。これまで大湊高校と大湊中学が直線で1キロくらいの距離の所で連携を取って来た訳です。平成14年度から始まって、当初は大湊中学に入れば全員大湊高校に入れるという考え方でしたので、高校側もそういう形でほとんど全員を入れていたのですが、その結果、かなりの学力の格差が出てきたのです。いわゆる一般入試で入学して来た生徒と、レポートだけで入って来た生徒の学力の差が非常に大きくて、それを見直した事で大湊中学校からの生徒がだんだん減っており、在籍数は高校の4分の1程度です。とてもじゃありませんが、こういう形での一貫教育というのは既に当初の目的を外れているのではないかという気がします。中学校の校長先生と話した時も、もう解消したいという事でしたし、私も相談したのですが、結論としてはこの地域に実態として合わないのを解消するべきだと私も感じました。これは、少子化も然る事ながら、大湊中学校の生徒はだんだん減って来ており、代わりに大平中学校、大平小学校が増えて来ている訳ですが、これは街の住宅事情が変わっているのでもやむをえないのです。子どもが減って来ているのは確かですが、むつ市の中の住宅地がそういう動きを示している訳ですから、結論としては人口の少ない街には一貫教育は馴染まないというふうに思いました。併設型は別として、人口の少ない地域の中高一貫教育というのは、田子高校の場合は全く逆なのでよいと思いますが、大湊高校の場合は解消した方がいいと思います。

事務局

大変申し訳ありませんでした。意見につきましては割愛したという事は決してありません。原則として全て掲載しておりますので、何らかの理由でFAXが届かなかったという事だと思います。こちらの手違いで申し訳ありませんでした。

高山委員長

生の声として、中高一貫について、高校の校長先生、中学校の校長先生の話も踏まえた意見をいただきました。地域の方々の意見を代弁するような話をいただければと思います。

E 委員

三本木高校附属中学校は初めての併設型中高一貫校という事で、募集をした所、3.18倍という倍率で非常に関心も高く、沢山の保護者や児童が見学に来たりしているようです。地域の中核となる進学校であるという事もあると思います。やはり中等教育学校ではないので、そのままストレートという訳ではなく、その時点で考えて他校も受験は可能ですが、ほとんどがそのまま上がって行くものと考えます。6年間の一貫教育で、自分の進路選択に応じて教育を受ける事ができる、勉強して行く事ができるという事で、かなり地域の関心が高いという気がしています。ただ、これからスタートしていく訳ですから、実際にはいい事ばかりではないかもしれません。学年2学級と規模が小さいという事で、部活動の制限とか、部活の遠征費の捻出等に色々な活動の制約もある訳です。実際にどういう形で動くのかは分かりませんが、今の所は、地元地域の生徒と保護者の期待が高いので、県内の地域的なバランスを考えて1~2校の併設型中高一貫校があってもいいのかなと思っています。ただ、まだ十分に状況を検証しないままたくさん作るという事ではなく、やはり動きを見ながら作るという事です。志望者数があるからといって闇雲に作ってしまうと、それは受験の低年齢化を招く事になりますので、その辺は十分考慮した上で作るべきだと考えます。

高山委員長

事前に皆さんからいただいた意見の中に、先進事例に関して様々な検証をするべきという声もあります。地域バランスを考えて、どんどん作るという事ではないと思います。また、先程の意見も踏まえて、中高一貫については考えて行くべきだろうと思います。三本木高校における中高一貫の成果や反省等を大事にしながら進めて行くべきだろうと思います。地域バランスという事について、事務局の方に要望等はあるのですか。

事務局

直接的なそういう要望はありません。もし要望があれば、こちらに示す事になると思います。

M 委員

教育委員会の方に大湊高校から毎年意見書のようなものが出ているようですが、そういうものが出ていませんか。

事務局

研究開発学校という文部科学省指定の会議がありますので、その会議の報告書などは来ています。今年は1月9日に会議があり、当方から指導主事も出席しています。

M委員

その中で、そのような話が出ましたよね。

事務局

9日の会議でそういう話が出ていたと聞いています。ただし、その会議は有識者の会議という事で弘前大学の助教授などが委員長として入っていて、その方々の意見もありますので、そういった事も含めて教育長の決済を経て文部科学省に提出するという事になっています。その意見だけが中心になっている訳ではありませんので、この点は理解いただきたいと思います。連携型の成果は十分あると認めつつ、一部難しい部分もあるが旨く行っている部分も大きいのではないかと話になっているようです。

M委員

つまり、中高連携で乗り入れ授業をしたり、レインボー学習をやったりという事で非常にプラスの面があるという事は聞いています。ただし、実質的に200人の定員に対して19人か20人しか入って来ないというのは、一貫教育としてそれでもいいのかという事になる訳です。そういう意味で話しました。

高山委員長

市部での併設型という事で、全国でも注目されたという事ですが、田子高校は様々な部分で地域において非常に旨く行っているという事です。これについて、今後はどうするのかです。先程もお話があったように、新しい取り組みが始まりました。全て推進という事ではなくて、中高一貫の成果と課題を踏まえ、色々と検証しながら、地域バランスも取りながら、という方向ではないかと思います。地域の学習としてはこういう形でないといけない部分がありますし、新たな取り組みとして評価されるべき部分ではないかと思います。皆さんの意見を見ると、色々な反省を踏まえながら、引き続き中高一貫については推進して行く方向で進めたいと思います。

A校長

中高一貫ではない中高連携があります。私は県高校教育研究会数学部会長も務めていますが、数学ではカリキュラムの関係で中学校から高校に移行したものがありません。それから、入試制度も変わりました。そのような事を踏まえて、平成15年から青森市内の中高連携として、数学の先生方が連携して問題集を作ろうという事で、もう4年目になりました。そして、昨年は県高校数学教育研究大会で全体協議会の中に中学校の先生方にも来ていただいて、パネルディスカッションを行いましたし、パネラーとしても参加いただき、会場にも20名程来ていただきました。色々な状況を話し合っておりまして、昨年度から私達高校の教員も中学校の研究大会に出向いて行って、研究内容を色々こちらでも学ばせていただくという連携が青森市内では大分進んでおります。今、多くの学校が中高の連携で作った問題集を、高校合格から入学までの間をつなぐ、つなぎ教材として採用

しています。この事がきっかけになって、英語や国語でも動きがあります。私達がこれまでやってきて、いかに中学校と高校の教員の交流がなかったかと感じています。高校と中学校の先生が数学を通じて同じ悩みを持っていたり、お互いに依存する所があったりという事がようやく分かりました。夜飲み会をやりまして、懇親を深め、お互いに本音が出て、中高の数学をこのようにして欲しいというような話し合いがあり非常に良かったです。そういう意味での連携はとても大事だと思います。

高山委員長

学習活動における中高連携という事だと思います。青森市では、進学指導なり、学習指導なりの学習活動における連携に取り組んでいるという事ですので、参考にして欲しいと思います。

それでは、高大連携の部分についてです。事務局から説明があります。

事務局

資料としては配布していませんが、国の調査の中で現在回答中のものがありますので、今後多少の数値の変動があるとは思いますが、途中経過について口頭で説明します。大学の科目等の履修・聴講生等又は公開講座等の制度の活用状況については、公立高校の平成16年度は40都道府県で682校、平成17年度は40都道府県で768校となっています。大学教員による高等学校での学校紹介や講義等を実施している学校数については、公立高校の平成16年度は47都道府県で1,696校、平成17年度は47都道府県で1,788校と、いずれも増加傾向にあります。ちなみに本県ですが、大学等での聴講・公開講座等を実施している学校は、平成16年度が7校、平成17年度が8校となっています。高校における模擬講義・大学紹介等については、平成16年度が27校、平成17年度は28校と、こちらは微増という状況になっています。

高山委員長

全国と県内の状況について、事務局から報告いただきました。全国はどんどん進んでいる状況ですし、青森県も僅かながら増加傾向にあるという事で、この傾向は今後一層深まって行くという感じがします。これまで色々話を進めて来ましたが、専門性を深めるという点で大学や研究機関は欠かせない訳ですので、その辺の話も色々書いてあります。

F 委員

資料にも書きましたが、また事務局からも説明がありましたが、大学からの一方的な出前授業とか見学などがある訳ですが、そういう事ではなく、専門高校から何かできないかと考えています。そういう事がないと、何か一方的な感じがします。今までは、例えば弘前大学工学部であれば、本校に大学生が実習の見学に来ています。大学の实習と工業高校の实習は全く違うと思いますので、そういう事を学んで行きます。一方的な関係だけでなく、専門的な面で関係ができないかと思っています。地理的な関係では、弘前大学とか五所川原の職業訓練校と研究的

な分野で連携できればと感じます。

高山委員長

専門性の高い部分の高校が中心の話だと思いますが、佐藤委員いかがでしょうか。

H委員

やはり一方的な関係という部分があります。具体的には、大学に入ってからのリカレントの内容とか、数学や物理など習っていないものをやらなければならないので、やっている内容の交換などです。後は個々の生徒の情報交換、例えば出席や成績などを学期毎に、個人情報としてではなく、全体として調べた結果をもらって授業に反映しています。現状は、単なる連絡会、報告会のような形です。

高山委員長

方向としては、どんどん進めるべきという事だと思います。特に県内の大学は点在している部分がありますので、地理的な部分でハンデがある学校もあると思います。県内にも大学、短大、職業訓練所などがありますし、様々な部分で専門性を高めるため、あるいは教員の学术交流という事で、高校の先生が大学に行ったりという事ができると思います。そのような面で、高大連携は進めて行くべき部分だと思います。進め方はそれぞれ違うと思いますが、当方ではこのような事をやっているとか、他県の事例でも構いませんがどなたか意見をいただけませんかでしょうか。

D委員

中学校と大学の連携について、私の学校では近くに大学がありますし、中学校には総合学習というのがありますので、大学から来てお話していただいています。勿論大学にも行って色々な形の実習をしています。うちの学校以外にも青森市内の学校ではそういう形を取っている所がたくさんあります。もう1つは、弘前大学教育学部と県下の小学校校長会、中学校校長会による研究・懇親は行っています。

高山委員長

営農大学校も受け入れの対象になると思います。農業高校や工業高校の実績はいかがでしょうか。

L委員

プロジェクトなどを生徒でやっているのですが、高校では施設・設備が限られていて、高度な分析等は高校ではできないので、大学に依頼します。大学は高度な施設・設備を持っているので、そういう面では協力してもらっています。近くの大学ですが、大学の教職課程を専攻している学生達は、学校の授業を見たり、行事に参加したり、農業高校の実習などへも来て勉強している場面があります。

G 委員

八戸高専ですが、中学校と高専、高専と大学という両方の交流を行っています。特に中学校の場合には、体験入学に来てもらうとか、中学校を訪問させてもらい情報提供を行っています。大学の場合には、どちらかという共同研究が中心になります。弘前大学への編入学という部分もありますので、そういう意味で高校と同じように交流しています。また、大学の場合は単位互換が15単位程度あります。今は弘前大学も独立行政法人となり、民間企業と一緒に自分で稼がないといけなくなりました。私達もそうですが、入学定員が無いといけないという事で取り組んでいます。逆に、たくさん来過ぎて高校の先生が困っているかもしれません。我々もそうですが、スケジュールが大変だという事があります。

高山委員長

大学も従前に比べて、セールス的と言いますか、企業としての性格が強くなって来ていて、連携に取り組む姿勢が強くなっているようです。今、連携が流行しているので、どこの大学も色々な所と連携して色々な事をやっています。高校と県外の大学とも連携して行くケースも出てくると思います。高大連携の在り方という事については、本県の教育施策の展開を視野に入れながら、1つの方向性のメニューを用意した方がいいのではないか、と思います。

それぞれの専門分野の大学との連携を深めるという事で、ある程度具体的にスケジュールやメニューに取り組んでもいいのではないかと思います。環境づくりの時代は終わり、一步踏み出す時代ではないかと思います。この点については、皆さん異論は無いと思いますので、方向性をこの委員会で打ち出して行きたいと思います。

それでは、これまでの総括という事も含めて、佐々木副委員長からお願いします。

佐々木副委員長

総括という事ではなく、気になった事を話します。原子力科についてですが、私は新聞の立場になりますが、国も県も原子力施設推進の立場ですが、中立的な立場が教育の在り方かもしれません。エネルギーの勉強をするという事は広範な分野かもしれません。委員長が言うように風力もあります。その中で、原子力に特化する事が県民の間でどういう反響を呼ぶのだろうか、という事が新聞社の立場としてはあります。その所は、教育の中立的な部分でどのように考えて行くのかという事を、慎重に考えた方がいいのではないかという印象を持ちました。多分、福井県や福島県のように原子力を設置している所にある工業高校が、エネルギー政策、原子力政策、あるいはそういう施設・設備を利用して、そのような教育を展開しているのかも含めて検討した方がいいのではないかと思いました。

高山委員長

第4回の専門委員会では、検討会議からの意見・指示事項を中心に話し合いを進めて来ました。そこで、佐々木副委員長からありましたように、地域から

の要望にどう応えるかという事がありました。検討会議からは玉虫色では困るという事がありましたので、その辺について申し訳ありませんが、持ち帰って事務局と整理して、皆さんに示したいと思います。少し時間がかかるかもしれませんが、また意見をいただいてまとめたいと思います。

閉会

司会

次回の会議は5月を予定しておりますが、皆様の御都合もあると思いますので、日程を確認・調整の上、改めて日時会場等の詳細につきまして、文書にてお知らせさせていただきます。

以上をもちまして第4回第2専門委員会を閉じさせていただきます。本日はありがとうございました。